

# Glocal Tenri



4

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.4 April 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
「陰膳」の共食文化と「みかぐらうた」  
／井上昭夫 ..... 1
- 天理教教理史断章 (52)  
城尾文書②  
／安井幹夫 ..... 2
- 天理教海外伝道の資料 (4)  
上海伝道関連史料④  
／深川治道 ..... 4
- 世界平和のための宗教対話 (19)  
カソリック世界：お布施倍増  
／山口英雄 ..... 5
- 今日の時代における宗教批判の克服学 (16)  
“宗教家”のつごう・“信徒”のつごう  
／金子 昭 ..... 6
- ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (13)  
エスニシティから文化アイデンティティへ  
／井上昭洋 ..... 7
- 特別寄稿  
“グローカル” 経営者・豊田章男社長に学ぶ  
／村山元英 ..... 8
- 第8回天理スポーツ・ギャラリー展報告 (14)  
体操競技  
／難波真理 ..... 10
- English Summary ..... 12
- おやさと研究所ニュース ..... 13  
Love Green Nepalの近年の活動をネパールで調査／伝道研究会「アメリカスの日系宗教」(4)／新刊案内／第6回伝道フォーラム「コンゴ伝道における諸活動」開催

## 巻頭言

### 「陰膳」の共食文化と「みかぐらうた」

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

第二次世界大戦中、私の父は二度召集令状を受けて、戦地に赴き九死に一生を得て、最後は米軍の捕虜になり、運よく餓死することもなく帰国することが出来た。しかし、帰国してからの数年間は戦場で患ったマラリアが薬もなく完治せず、身震いの後に高熱がやってくる度に子供たちは布団を父の身体の上に積み重ねて馬乗りになり、押さえつけたりした。夜はジャングルをさまよって敗走している夢にうなされているのか、小声で「友軍か？」と誰何したり、「敵機来襲！」などと大声で叫んで、一家が寝床から飛び起こされたことは再三あった。

最近のマスメディアにおいては、母国より紛争地の海外に派遣された外国人兵士たちの銃をもった写真や、戦争の被害者の悲惨な映像が激増している。しかし、アフガニスタンの現状と将来に深い関心をもっている私にとっては、メディアの話題にはならない留守家族や帰還兵のことが気になって仕方がない。その反動からか、60数年前に経験した戦時中の身近なできごとを思い出すことしきりである。たとえば、父が出征中、母が毎日「陰膳」を供えていた姿。当時戦地に息子や夫を見送った日本の母親たちは「陰膳」を供えるという習慣をもっていた。家族の中の不在者の食事を拵えることによって、戦地や旅先で食事に不自由しないよう帰還の安全をねがって、本来は食事を共にすべき不在者にもまづしい食事を分配することによって、家族の絆を強固にしていたのである。

それだけではない。日本人は死んだ祖先や神々とも食事を共にする習慣をもっていた。各家庭では神棚や仏壇にも食物をささげ、祭典があればその後には直会という神との共同飲食もおこなっていた。キリスト教社会でも、イスラム教徒でも、食事をする前には、感謝の祈りを言葉で表現する習慣がある。ところが現在は、食べ放題の新聞広告、そして健康によろしい食事かそうでないかという贅沢肉体系至上主義がテレビ番組で中を利かせている。このような愚かな日常番組を見ていると、

貧困・粗食から立ち直ったこの国の力はどこへ霧散したのかと心配になる。宗教儀式の非日常化は、道徳心の退化にもつながる。立派な説教や解説より、信仰生活の足元からの日常回帰が求められる。

宗教にはその原始的段階において、食物を媒介とする神人交流のさまざまな歴史があった。一説には14世紀までカトリックでは供物の風習が残っていたという(谷泰「食事と文明」1973)。ミサの時には酒を持ち寄って、ミサが終わった後、司祭ともども神道の「直会」にも似た共同飲食をしていたのである。神人交流、つまり神と人間の交流は、キリスト教では聖なる「コミュニケーション」と呼ばれ、聖餐式を意味している。キリストの血であるワインとキリストの肉を象徴するパンを教会の参集者に分かち与える。その血と肉を食べることは、象徴的の神人共食とみられる。神への供物の分配を通して神と人間が交流すること、その行為がそもそも「コミュニケーション」という言葉の語源であった。しかし、イスラム教やキリスト教といった一神教からは、世界宗教としての性格を備えていくプロセスの中で神概念は抽象化され、人間の側からすると神への交流手段も「もの」ではなく「ことば」、つまり言語表現を伴うさまざまな「祈り」を通じてなされるようになった。神と人間の「コミュニケーション」がロゴス化・言語化されることによって、神は人間から遠ざかったのではない。

その意味で天理教における「みかぐらうた」の身体動作と音楽を伴う神人対話は、言葉(ロゴス)に依存する「祈り」とは異なる次元にある「コミュニケーション」とみられる。天理教原典に「祈り」という用語が見られないのはその故であろうか。「みかぐらうた」の「ことば」は、舞うことによるのみ動き始め、舞手によってのみ食され、不思議な味わいを与える聖なる「もの」(エネルギー)に再生するという感触を与える。その感覚は「陰膳」の共食文化と心根の世界において通じているのではないかということを思わせる。